

Unobtrusive Measures (非影響的測定法)

細江 達郎 (岩手大学)

1. はじめに

概ね行動科学の実証的方法は研究者が対象者になんらかの刺激を与えそれに対する反応を問う形をとる。研究活動が研究者の自ら設定する枠組みにそって対象に接近するという自覚的な活動であるかぎり、当然な営みであることといえる。しかし、ほとんどの実験科学において当然視されているこの方法に関して、こと人間を対象とする分野においては問題無しとはされない。それどころか特に人間関係やその相互影響を主たる対象とする社会心理学では、いわゆる社会心理学の危機論争の中で、実験の人為性や非日常性といった批判を受けることとなる。その論争の中で示されたものの一つに実験的方法以外の看過されてきた手法の見直しがある。すでに1966年にWebb, J. E., et al. がUnobtrusive Measures: Nonreactive Research in the Social Sciencesという示唆的な書を出しているが、必ずしも十分知られた立場とはいえない。ここではそういった論議に沿いながら、この立ち場を紹介するとともに、特に観察法について触れ、その応用可能性について考察する。

2. Reactivity (影響性)

社会心理学の実験室実験に関する主たる批判はその実験的操作そのものの持つあるいは意図しない影響性を巡ってである。つまり、ある種の測定法はまさに測定しようとする事象に干渉したり、変化を与えるという指摘であろう。被験者が実験の場にいることを自覚することにより生ずる問題の一つはまさにこの影響性であるといえる。実験室実験に留まらず、研究者が対象者を選定しこれに研究者の枠組みに基づき質問紙を配付し、またインタビューをするという社会科学でもっともポピュラーな方法においてももちろんこの影響性は問題となる。それらの問題は以下のようなものが挙げられている。

(1) 調査されテストされていることに気づいていることの効果：つまり対象者がモルモットであると感じたら、テストされたのでよい印象を与えなければと感じたら、さらに提示された質問された刺激が以前には考えもしなかったことであり結果的にその内容にあらたな対応をするとき、測定手続きが測定結果を歪めることとなる。特定の応答者を求めないような観察法¹⁾においてもこのことは問題とされよう。例えば街路におけるTVカメラの存在はそれ自体影響的である、さらにはTV局や他の撮影者の名称は行動に差異をもたらすであろう。さらには伝統文化の儀式に立ち会う異文化の人物の存在は影響的なものとなることは想像に難くない。また、非影響的測定法として考えられる公文書(Archives)も完全なものとはいえない。文書管理や保存はそれぞれの部署でも優先順位の低い職務である。

1) Webb, et al. は観察法は非影響的測定法の重要な方法としてレビューしているが、同時にここで示したように観察法における影響性にも考慮が必要である。

もともとの資料作成時の歪みはもちろんのこと、研究者や第三者の資料活用が活性化するに伴いその整理が活発になるだけでなく、利用者に対応して資料が変化することもありうるのである。

(2)対象者としての役割の選択：自らが調査されていることに気づくことは、日常的に意識している本来の自分のなかから対象者として適切だと思われる特定に役割を選択させることとなる。対象者は多くの人々から選択され、その置かれた状況は日常的な自然な状況ではなく、さらに研究者からの教示による異質な設定におかれる。そこで対象者は実験者との間に相互に期待された役割を演じることとなる。実験や調査になれた対象者とナイーブな対象者ではその影響は異なる。質問紙やチェックリストは大学生にとっては日常的かもしれないが、多くの人にとっては異例である。不慣れである状況での役割演技は依存的か特異か不得要領となる。統計的なサンプリングで選ばれたことや回答の重要性を強調する教示がDK回答の増加を促すことをWebb, et al. は指摘している。

(3)変化を生み出す測定：最初何を尋ねられたのか、またその質問が答え易いものなのかどうかによって、後の質問に対する回答は影響を受ける。また厳密な孤立な状態での調査で無い限り、調査者が統制できない言語的な反応における同調行動や規準の設定が行われる。つまり結果は調査が行われたことによって創りだされた変化を含むことになる。

(4)反応の特異な構え：回答者は質問の反対な答えを示すよりは肯定的な回答を好むことはYes傾向として知られている。そのほか因果性が了解容易な表現、ステレオタイプの表現は好まれる。また強い表現より穏やかな表現に傾斜する。前(3)と係わるが連続した質問は前問に回答することで後問が徐々に定型化する傾向が見られる。

(5)調査者の側の問題：①調査者効果。回答者に影響を与えるエラーは暗黙の内に調査者のエラーを含む。調査者の期待は回答に影響をあたえる重要な手掛かりとなる。よく知られたようにRosenthal(1969)は実験者と被験者の間の相互作用に影響を及ぼす数種類のカテゴリーを示している。性年齢人種といった研究者対象者の生物社会的属性は相互に影響を及ぼし、男性と女性の研究者では別の実験をやっていることにもなると指摘をしている。同様に研究者の心理社会的傾向も被験者に及ぼす影響は大きい。実験の習熟度、被験者との知悉度も影響的である。実験初期の結果の仮説への一致度は実験者の行動に変化をあたえ、そのことが被験者に影響をあたえる。実験者の意図的無意図的な行動あるいは教示や練習はモデルとされ、実験場面では研究者の予測が実現するように変化することになる。しかし、よい結果をあからさまに期待することは被験者の公平性を喚起させ逆効果を引き起こすこともRosenthalは指摘している。こうした要求特性(demand characteristics)や実験者効果といわれるものはこれまで既に実験状況を意識さない方法、異なる役割をあたえること、さらには同じ影響条件下で実験群統制群を同時に処理する方法、実験実施者に仮説を予め教えない手法、仮説設定者と実験者さらには判定者を別な人物にするといった対処策が考案されているが¹⁾、その影響性が全て解消されることは在り得ない。

(6)調査者の側の問題：②調査用具(調査者)の変化。面接調査の場合、同一面接者が多数の対象者に異なった時間に接触する。また追跡調査やパネル調査では同一面接者が同一

1) 実験者効果の対策についての検討は種々なされている。Crano & Brewer(1973) Carlsmith, et al. (1976)や本邦では渡辺(1987)などの方法の概書に詳しい。

対象者に時間を越えてインタビューすることもある。初回より複数回を重ねることにより、レポートの質・習熟・疲労・基準の変動といったネガティブ・ポジティブな影響が発生する。つまり、時間と経験により調査者が一種のフィルターの的な変数となることになる。筆者らが行っている長期追跡調査では対象者の発達段階により調査への関与度が異なるだけでなく、(5)で示した面接者の属性特に対象者との相対的な発達段階差や同一面接者が初回面接者が影響性を持つことが明らかにされてきている（細江1993）。

3. 非影響的測定法

Webb, et al. は非影響的測定法について物的な痕跡（Physical traces）、文書（Archives）及び観察を挙げている。

(1) 物的痕跡：心的過程や意識を重視する心理学の研究において、物的な証拠は一見して無縁のようにみえるが、行動とその痕跡は重要な指標である。多くの目撃者の言語的な表現が道路を通った人がいないとしても、新しい靴跡は決定的な証明となる。この物的痕跡には行為者によってそれが使用されることによって摩耗していく程度を測度とする摩滅（Erosion）尺度と逆行行動の物的痕跡が堆積している程度を尺度とする蓄積（Accretion）尺度がある。これは対象者に面接ができない考古学者歴史学者等では必然的方法である。この尺度は展示物等の人気度をその周辺の床等の摩耗度を使用したり、アルコール飲料へ嗜好度を面接や質問紙ではなく捨てられ酒瓶の数量を使用したりする自然な状況下が先ず可能である。分別ゴミ収集への態度は質問紙よりゴミ箱の調査の方が実態に近い。さらに幼児施設で一定時点に与えられた靴や衣服の消耗度から子供の活動性の差異を明らかにするとか、新刊雑誌の広告への注目度等も各ページ開扉が確認できる方法（糊つけ、さらには指紋や汚れ）といったより統制的尺度の作成も可能である。

(2) 文書や記録：これには継続的に公的機関等によって執り行われている公文書と私的あるいは日記やメモといった個人的な記録がある。後者に関しては既にAllport (1942) の示唆に富んだ著作があり、心理学と関連科学でのより積極的な利用が再評価されるべきであろう。あまり特殊で高次の専門的水準でない限り、公的な記録や調査結果は少なくとも過去の現象については、普通の調査者があらためて調査しようとすることに関しては概ね網羅されている。こうした既存資料はもちろんそれが作成された時は「影響的」であり、作成意図に関する周知の問題性があるけれども、そうしたことへの考慮と単独使用をさけることによって、多くの利点がある。研究者は問題性の方に力点を過度に置き、自ら選んだ視点による調査の妥当性を強調する傾向がある。さらに既存資料はそれへのアプローチに努力が必要とされる。依頼文のみで文書を取り寄せるアームチェア調査ではこの問題性は一層大きくなり、資料の現実性は薄くなる（細江1983）。個人が提示している資料も有効な活用によって興味あるデータとなる。自動車に貼られた法と秩序を標暴する候補支援ステッカーと車の納税証明書の添付との対応しない関係は質問紙では理解できないものであろう（Wrightsmann 1969）。

(3) 観察：観察法は非影響的測定法のもっとも有効な方法とされる。しかし、容易に想像できるように観察に「影響性」がないとはいえない。測定されていることが気づかれていない、何を測定されているか明確にあるいは特定化されない、あるいは時間経過により自

然な状態に近くなる参加観察を行う、といった手法により、影響性に様々な考慮がなされている。また単なる観察ではなく、さまざまな機器を使用し、また実験的な設定で行われる多くのフィールド実験：人種偏見を集団のクラスターの性質で確認したり (Campbell, et al. 1968)、攻撃行動を、その原因としての人物の属性を統制して明らかにしたり (Doob & Gross 1968)、また多様な援助行動実験 (Latane & Darley 1970)、が工夫されている。

長期的な観察法にもとづいた生態学的心理学を提唱しているBarker(1965)はデータ収集システムでの心理学者の係わりには対象とする有機体に伝達者としてかわるか操作者としてかわるかの二つのタイプがあるとしている。操作者としての心理学者は被験者に操作者として働きかけ、状況を設定し、それに対する反応を求めるのである。Barkerは自ら関係したフラストレーションの研究を通して、実験室で得られた結果と日常場面で経験するフラストレーションの差異が大きいこと、子供の綿密な観察を通して、刺激入力に反応するのは多くて半数に過ぎないことなどから伝達者としての立場をとる観察法を必須な方法と考えたのである。このBarkerの方法は多様な可能性をもっており、今後その使用の拡大が望まれる (細江・田名場1944)。以下に筆者が想定している非影響的測定法による犯罪発生場面に関するこの視点について試論を示しておく。

(4)観察法：生態学的心理学とその応用。Barkerは長期の観察から人間的構成要素と物的非人間的構成要素からなる行動セッティングの枠組みを提唱したが、これは彼の生態学的心理学の理論の中核でもある。その特徴は次のように示される。①セッティングは上記二つの構成要素がある。②二つの構成要素は類似形態的である。③一定の行動のパターン

(定立型)がある。④外壁などで取り囲まれている、⑤自己制御システム [感受メカニズム：情報感知→執行メカニズム：適切性の判断→維持メカニズム：容認できない場合修正・排除]を持っている。こうした特徴は犯罪発生場面研究への展開が可能である。それは、環境との係わりで行動を変容できるという基本的な視点は当然のこととして、上記と対応して以下のことが想定される。非人間的構成要素は似た形の行動を誘発することになる

(ハシゴ→のぼる・コーナー→隠れる)。人の実行できる行動 (定立型)は全て犯行者は当然行える。定立型の行動は不審に思われないので犯行は定立型の行動でもおきるが、非定立型の犯行との質的な違いも注目すべきである。まとまった行動は隔離されている (家は塀で外から区別されている)。自己制御システムの異常 (感受システム：無いか不完全、執行メカニズム：誤判断、維持メカニズム：破壊又は遅延作動)が考えられる。犯罪発生場面に関するこのような特徴を持つ行動セッティングを観察法にもとづき確認できればより応用度の高い研究の展開が可能となる。

4. おわりに

以上非影響的な測定法について概述してきたが、この方法は周知のような多くの問題性がある。そしてその改善に不断の努力が求められる。しかし、本来日常的なレベルでの行動の説明を主眼とし社会心理学ではその問題性に留意するとともに、より柔軟に積極的に使用すべきである。自然科学との境界にある行動科学はその「科学性」への不安から、方法として「厳密性」「客観性」を常に追い求めようとする。しかし、社会的状況での人間のデータが調査者と全く独立して「客観的」に存在すると考えることは難しい。そうした

「影響」の産物である調査結果をその影響場面から切り話し、いかに厳密に処理してもそれは調査記録の「結果」であり、現実の行動と正確な対応があるといいがたい。これは偏見といった特殊な領域では特にそうである。もちろんデータの相対性や構成性を正面から主張し、多くの客観的手法を否定することを意図するものではない。行動科学の対象が複雑多様であり調査手段が人間であるかぎり、こうした影響性は避けられない。形式的な客観的な単一手法に過度に頼るのではなく、ソフトな手法も含め多様な手法を相互補完的に使用することが求められる。ある命題が二つかそれ以上の独立した測定手続きにより確かめられたとき、より説得力がある。さらに調査においてはもちろん実験室実験においても質問紙結果や実験結果の数字だけでなく、そのデータがどのような調査者と対象者との相互作用と文脈の中で取得されたかの記録をデータして加えることの必要性はあらためて主張されて然るべきである。

5. 文 献

- Allport, G. W. 1942 The Use of Personal Documents in Psychological Science(大場安則訳 1970 心理学における個人的記録の利用法 培風館)
- Barker, R. G. 1965 Explorations in Ecological Psychology. AP 20-1 1-24
- Crano, W. D. & Brewer, M. B. 1973 Principles of Research in Social Psychology. Mac-Graw-Hill
- Carlsmith, J. M. & Ellsworth, P. C. & Aronson, E. 1976 Methods of Research in Social Psychology. Rand McNally
- Campbell, D. Kruskal, W. H. & Wallance, W. P. 1966 Seating Aggregation as Index of Attitude . Sociometry 29 1-15
- Doob, A. N. & Gross, A. E. 1968 Status of Frustrator as Inhibitor of Horn-Honking Responses. JSP 76 213-218
- 細江達郎 1983 フィールド・ドリサーチ論 (二) 社会心理学的フィールド・リサーチの実際 青年心理 38 150-168
- 細江達郎 1993 下北調査30年 東北心理学研究 43 IX-X
- 細江達郎・田名場美雪 1994 生態学的心理学(Ecological Psychology)の方法の施行 アルテス リベラレス 55 135-151
- Latane & Darley 1970 The Unresponsive bystander(竹村研一・杉崎和子 1977 冷淡な傍観者 プレーン出版)
- Rosenthal, R. 1969 Self-Fulfilling Prophecy. [Psychological Today](Reprinted. Krebs, D. ed. Readings in S P :Contemporary Perspectives 76-77ed 276-280)
- 渡辺浪二 1987 実験法の実際 末永俊郎編 社会心理学入門 東大出版会 59-98
- Webb, J. E., Cambell, D. T., Schwartz & Sechrest, L. 1968 Unobtrusive Measures : Nonreactive Research in the Social Sciences. Rand McNally/Chicago
- Wrightman, L. S. 1969 Wallance Supporters and Adherence to "Law and Order" JPSP 13 17-22